

## 歴史民俗資料館だより

# でんわき 電話機

電話は、明治二十三年に東京・横浜間で開通し、一般の利用が始まりました。

笠松には、明治四十年（一九〇七）に電話が開通しました。岐阜日日新聞の大正元年（一九一〇）十月二十六日の記事によりますと、笠松の電話加入者は六十人と記載されています。電話は、その後も増加の一途をたどり、通信文化の花形となりました。

当時の笠松電信電話局管内の加入数は、昭和二十一年に三百三十六台、昭和二十八年には五百六十八台となり、この年以降は特に著しく増加していきました。

電話加入数の増加と共にサービスも向上していき、先ず電話の自動化は、県下では昭和二十八年六月、大垣市を最初に、三十年に岐阜市、三十二年には笠松町と順次実施されています。自動化以後の笠松の加入電話数は、多い年には年間六百台もの増加となっています。

この他の電話サービスでは市外



局番の改善があります。従来、市外電話回線には制限があり、電話局に市外通話を申し込んでもすぐには通じませんでした。改良が重ねられ即時通話が実現されていきました。また、公衆電話の設置も戦後大きく進展したサービスです。

終戦時には、東海四県を合わせても使用可能な公衆電話はわずか六十台程度でした。事実上ないに等しいものでしたが、昭和二十二年から普通公衆電話、昭和二十六年からいわゆる赤電話と呼ばれ

る簡易公衆電話と委託公衆電話、昭和三十四年から喫茶店などに置かれたピンク電話、昭和三十六年から鋼鉄製の公衆電話ボックスが設置され、利用者の便宜が図られました。

昭和五十七年にはカード式公衆電話の登場があり、公衆電話の利用は増えて行きましたが、携帯電話の普及によりその利用は減少しました。

サービスは一般の電話にもおよび、昭和三十四年から比較的小規模の事務所や商店などで使用される切替ボタンによるビジネス電話、昭和四十七年からは一本の電話で四台までの電話機が利用できるホームテレホンも利用され始めました。

終戦直後の困難な状況から立ち直った電話は、電電公社のサービス面での努力もあって驚異的な増加を続け、笠松の場合、昭和四十七年までは電話加入数は世帯数を下回っていましたが、四十八年から是一家に一台の電話が普及しました。

更にその後も増加し続けて昭和五十七年には世帯数六千六百六十六に対し加入電話数は八千四百三十七台にも達しました。

資料館では、民俗資料として明治三十年のデルビル磁石式甲号卓上電話機が展示してあります。

笠松町歴史民俗資料館

〒501-6052 笠松町下本町87

☎388-0161 FAX388-0185

## 企画展

きょうど せんてつ かんしじん  
郷土の先哲 漢詩人  
いとう かん ぼう  
伊藤冠峰

【会期】3月1日（火）～21日（月）

【開館時間】午前9時～午後5時

【休館日】月曜日、祝日の場合はその翌日

【入館料】無料

